



「テレビ静岡 開局 50周年記念映画」

全盲の姉と
重度障がい
の弟。
私たちはなぜ
生まれてきたのか。

イーちゃんの 白い杖

20年間の心の記録。
想像を超える絆に
あなたは思わず涙する――



語り 春風亭 昇太

音楽 川口カズヒロ

監督 橋本 真理子

(DATSUN320)

撮影: 杉本真弓 編集: 大澤裕也 効果: 山川英夫 デザイン: 森部道子
配給協力: 浜松市民映画館 プロデューサー: 永井 学 制作・配給: テレビ静岡
2018/日本/108分/DCP/ドキュメンタリー ©テレビ静岡

HP: <http://www.sut-tv.com/ichan/>

自主上映会 募集中



感動のTVドキュメンタリーをついに映画化！

STORY

こながや いおり
小長谷唯織さん・イーちゃんは20年前、静岡盲学校で白い杖の使い方や点字など視覚障がい者として生きる基本を学んでいた。目の見えない世界は想像を超える発見がある。だが徐々に「なぜ自分だけ違うのか」不思議に思うようになった。そして保育園とは違い、友達がいない寂しさを実感する。障がいを持った者同士分かり合えると信じ、イーちゃんは中学から東京の盲学校へ。しかし、いじめを経験する。大好きなピアノで気持ちを整理しようとするが、追いつかなかった。「現実から逃げないでほしい」と厳しく接する母。ピアニスト、歌手、作家…夢も破れ、何もかも嫌になった。障がいがあろうがなかろうが、悩みは同じだ。「学校にいても家にいても辛い」「死にたい」とも考えた。でも、そばにはいつも2歳下の弟・息吹^{いぶき}がいた。重度の障がい^{いぶき}で1人では、食事^{いぶき}も歩く事^{いぶき}もトイレにも行けない弟。入退院を繰り返し、手術を何度経験しても前に進む弟。イーちゃんは自分の甘さに気づき、自殺を踏み止まる。障がい者が生き、働く。壁はいくつも乗り越えなければならない—しかし、その強さがあれば、幸せは必ずやってくる。

互いの顔を見たことがない姉と弟、支える家族。
20年目に出した答えとは。
果たして、私たちに何ができるのか—。



唯織と息吹 この出会いが、私を変えました—

監督 橋本真理子

障がい者にカメラを向けることがタブーとされていた20年前。盲学校100周年のニュース取材中、目の前を駆け抜けたのが、イーちゃんです。「この子は感性が違う」と直感し、同時に弟が重度の障がい児だと知ります。本当は1回目の番組で終わるはずでした。でも、唯織と息吹はこの先どう生き、生きやすい社会になるのか心配でした。2人に会わなければドキュメンタリーの醍醐味を知る事も、後の番組を世に出す事もできませんでした。ところが2016年、神奈川県で重度障がい者を狙った殺人事件が発生、許せませんでした。人は年をとれば目も悪くなり、歩くのも億劫になる…誰もが、障がい者になると私は思います。

唯織も息吹も少し早かっただけ。2人が生きやすい社会は私たち自身が生きやすい社会になるはず。障がい者が隠れて生きる社会はやめたい。障がいがあろうがなかろうが、誰にも生まれてきた意味がある—この思いを伝えたくて映画にしました。

<制作番組 主な受賞歴>

1999年「イーちゃんの白い杖—100年目の盲学校—」第8回FNSドキュメンタリー大賞 特別賞
2001年「こちら用務員室—教育現場の忘れ物—」第10回FNSドキュメンタリー大賞 グランプリ
2007年「章姫—父が残したイチゴ—」第23回農業ジャーナリスト大賞 特別賞
2010年「いおりといぶき—私たちが生まれた意味—」世界子どもの権利賞 2011グランプリ
第19回 FNSドキュメンタリー大賞 優秀賞 厚生労働省「児童福祉文化財」
2012年「いのちの乳房—再建に挑んだ女神たち—」第54回科学技術映像祭 文部科学大臣賞
第50回ギャラクシー賞 奨励賞

